

という、聴診器が発明され、現代では腎移植で有名になっているあの病院と関わりのある人物である。

民衆と王室政府の間の戦いの流血もあれば、恐怖政治につながるギロチンの処刑による流血もあった。

この断頭台ギロチンはさまざまな様式の死刑を均一化する提案をした解剖学者ジョゼフ・イグナス・ギヨタン (Joseph Ignace Guillotin, 1738~1814) の名に因んでつけられたのだが、当人は生涯それをいやがっていたという。

これが実用化されたのは一七九二年春からで、六〇キロある鋼の刃を三角型にすることによって切れ味をよくし、処刑者の苦痛を小さくしようという外科医アントヌ・ルイ (Antoine Louis, 1723~1792) の改良が加わって完成した。一時はルイゼットとかルイゾンと呼ばれたこともある。ルイは王立外科アカデミーの事務局長であって、現在パリ大学の旧医学部と呼ばれている講堂を完成させたり、内科と外科の結びつきを深めようとしていたり建設的な業績の多い人物である。

医学に及ぼす革命の影響は何といっても、内科医と外科医が同じ教育機関から育つように改革されたことである。医学部も外科学校も廃止され、医療担当者が一人も育たぬ期間があったが、一七九五年に健康学校 (Ecole de Santé) という名で、元の外科学校の校舎を使って再開された。この空白期間に大活躍したのが外科医ジョゼフ・デソー (Joseph Desault, 1738~1795) であつた。

この内科と外科の交点から十九世紀前半の華々しい臨床医学が

パリの病院を中心に花開くのである。ビネル、コルヴィザール、ビジャー、ラレー、ラエネック等がそれを担った人々である。

ちょうど革命の頃日本では吉雄耕牛・杉田玄白・華岡青洲らが活躍していた。『解体新書』(一七七四)と青洲の全麻乳癌手術(一八〇四)の間は三〇年あるが、その真中にフランス革命が起きているのである。彼等はフランス由来だということを知らずに蘭方の外科と信じてアンブロアズ・パン (Ambroise Paré, 1510~1590) の全集から書き写した外科絵図を大切にしていたのであつた。また青洲の内外合一という思想もアントヌ・ルイに通ずるものがある。

革命は二〇〇年前の遠い出来事だが、ルイ十六世やマリー・アントワネットの悲劇だけではなく、現代の実用医学の原点がキラ星のように並んでいるフランスのこの時代に思いをはせればパリ祭もたんなるお祭りだけにしておけないと感ずるのである。(平成元年七月例会)



紹

介

木村陽二郎著『江戸期のナチュラリスト』

ナチュラリストという呼び名がすっかり定着してきている。ナチュラリストといい換えただけで江戸時代の本草・博物家もずい分モダンに見えてくるから不思議である。この呼称を率先して提

唱し、ポタニカルアート史の研究で大活躍中の著者の数多い近著の一つである。

本書は、江戸時代の代表的ナチュラリストを側面から描写しつつ、日本自然誌研究の流れをたくみに通観している。園芸関係雑誌に連載した記事をもとに編集された肩の凝らない解説書の形をとっているが、著者の研究の発展と深化をいかに伝える充実した内容であり一読をおすすめしたい。

本書で扱うナチュラリストの主な者は、貝原益軒にはじまり、青木昆陽、稻生若水、丹羽正伯、植村政勝、阿部将翁、松岡怒庵、伊藤伊兵衛、後藤梨春、平賀源内、ツェンペリー、中川淳庵、建部清庵、大槻玄沢、小野蘭山、水谷豊文、宇田川榕庵、伊藤圭介、高野長英、渡辺華山、岩崎灌園、飯沼慾齋らであり田中芳男で締めくくっている。著者はその旧著『日本自然誌の成立』（一九七四年）において、蘭学の発展を三期に分けて考察した。第一期はリーフデ号の豊後漂着の一六〇〇年から一七一五年まで、第二期は吉宗が將軍となった一七一六年から一八二二年まで、第三期はシーボルトの来日した一八二三年から幕末の一八六七年までと区分したが、本書はこの旧著の第二期で書きたらなかった記事を筆にまかせて書いたとされている。したがって、第一期と第三期はさらりと流した感があるが、第二期は全三六章のうち二八章をあて、とくに享保期を中心とした部分は力作である。著者は享保期のナチュラリストを実際派、野外派と学問派、書齋派に色分けし、本書では後者より前者に重点を置いて記述している。朝鮮人参の栽培とかかわる阿部将翁に三章をあて、この中

将翁の清国滞在説が堂々と展開してある。史料の空白を埋める推論（仮説）がこのほか随所に披瀝してあり、著者の考察がよく窺われる。これが本書の大きな魅力であり楽しみでもある。

植物図譜類が、これまであまり注目されていなかった著作を含めて、数多く紹介検討されてある。『草木図説』の画法、葉の表面を黒くし裏面を白くする画法が、『花彙』以前の橋保国の『絵本野山草』においてすでにとられていることなどを教えられた。

全編を通じて見事な語り口で飽かせないが、將軍や大名とのドラマチックな交渉に焦点が置かれているため、やや関西や地方の展開状況の記述が少なく江戸中心の感を与える。しかし、ナチュラリストへの著者の限りなく暖かなまなざしの十分伝わる好著である。なお、江戸期に活躍し、明治になって亡くなったナチュラリストの中に梅村甚太郎を挙げているのは、甚太郎の事績（文久二年～昭和二年）からみて誤解と思われる。

〔朝日新聞社（朝日選書三六三）一九八八年

B六判 二四九頁 九四〇円〕

（遠藤 正治）

酒井シヅ・深瀬泰旦著『検査を築いた人びと』

臨床検査の礎となった一〇〇人を取りあげ、小さなエピソードを織り込み、しかもこれ以上は切ることができないギリギリの文章に要約し、人々を浮き彫りにしてゆくのだが、そこに漂う学研

的探求心と発明・発見の軌跡が鮮やかに、それにふさわしいものとして描き出されている。読み進むうちに、医学の流れを一気に下ることもなる。その時代と環境の中で医学的課題の中心が何であつたかを教えられることもなるだろう。

今日、簡単に結果が得られるという習慣に慣れてしまつたばかりに、それを開発した先人の苦心が忘れられようとしている……現在、われわれが何気なく利用している検査法にも、先人の汗がいっぱい染み込んでいることを本書は語ってくれる。高度な設備を持つほど、どのような経緯で生まれ、どのようにして確立されたかというのを忘れ、日常の簡便さに親しみ、結果したものだけで作業し、より正確に、より速やかにという時のニーズだけに対処してしまいそうな気がする。

そういう意味では、本書にとりあげられた人々の強い個性と幅をもつた知識がどのような方法で培われたかだけに焦点を絞って見るのもいい。しかし、この短い文章で語られる文字の間から湧きでる終りのない探求心はいったい何によつて支えられているのだろうか、などと考えてみると、誰もが目指し、踏み込んでいった軌跡を形どるメービウスの輪のような面に、何層にも蓄積された目的意識と、そこに生ずる蓄積されたものを持つた人々との文流が層をなし、脈々とした形で浮かび上がつてくることを改めて教えてくれる。

今に生きるわれわれは、ときとして、すでにある理論や法則を簡便さなるがゆえに置き忘れていることがある。そののみか直接検査に携わる人達でさえも、人名のついた検査法は耳にする機会

が少なくなつた。一度タイムスリップした気分、医師を経験科
学のなかの医学として位置づけたヒポクラテスを見てみては？
などと誘つてみたい。かならず新鮮なものに触れる事ができるに
ちがいない。また、先人の辿つた断片を改めて知るのも、ときには
必要ではないだろうか。そうした視点から本書は、われわれに
示唆を与えるところは大きい。さらに、本書は検査法を日常に
親しい存在にしてくれるガイドとしての役割から、著者に対する
共感だけでなく、感謝しなければならぬような気がする。

(中沢 澁)

〔時空出版 一九八八年 A五判 二二二頁 二、〇〇〇円〕

H・S・ペリー著 中井・今川訳『サリヴァンの生涯』(全三巻)

一八九二年のハリ・スタック・サリヴァンの出生から、一九
四九年のパリでの謎にみちたその死までが、大部の書物で丹念に
たどられている。いや出生からどころか、ともにアイルランド移
民である父方、母方の祖父母にさかのぼる出自までが、丹念に掘
り起されている。サリヴァンはニューヨーク州の田舎の農場で、
寡黙な父と愚痴っぽい母親のあいだのひとりっ子として育ち、孤
独な幼年時代を過ごした。シカゴ医学校を卒業すると、ホワイト
の下で精神科医としての第一歩を歩いた。次のシェパード病院
でマイアールと出会い六床の病床を任せられ、後世に彼の名を残すこ
とになつた分裂病に対する積極的な精神療法をはじめた。その後

ニューヨークで開業、強迫症の研究を行い、雑誌『Psychiatry』の編集(本書の著者・ペリー女史は、長年にわたりサリヴァンの片腕としてこの雑誌の編集にたずさわった)や講演、さらには精神分析のスーパーヴァイザーとして多忙な生活を送った。彼の関心は文化とベーンナリティの問題から予防精神医学、精神衛生、さらには国際紛争の回避まで広範囲にわたり、かつその活動は精力的だった。サリヴァンの思想と行動は、今日でもなお新鮮である。

しかし、意図的なものかどうかはわからないが、著者はサリヴァンの思想そのものには、あまり深入りしていない。第一巻ではサリヴァンの幼少年期をたどりながらサリヴァンの著作の一節をエピソードに引用し、彼の思想形成に幼少年期の体験が色濃く影響していることに折々触れていたが、その検討が本書のメインテーマの一つかと思つて読み進んでいたが、どうもそういうことでもないようだ。文献資料やインタビューを通してひたすらサリヴァンの一生を正確に描き出す、そのことに精力が傾けられている。それだけにサリヴァンその人を直接知る人しか書けない、血のかよった生き生きとした伝記となっている。同時にそれは、そのままアメリカ精神医学の発達史ともなっていて、たいへん興味ぶかい。直接サリヴァンを知る著者が、(もちろん文献にも詳しくあつてゐるものの)直接サリヴァンと関係した生き証人からの証言を精力的に収集しているところに、本書の決定的な価値がある。それだけでも、本書はそれに代る著書が今後決して現われるはずのない、貴重な歴史書といえる。この種の同時代人による

歴史書はわが国の医史学の分野でも、もっと書かれなければいけない、という印象をもった。古い過去の文献だけが医史学の研究対象ではないはずだ。

彼の思想については、主著と目されているものが、やはり同じ訳者によりみずす書房から出版されている。サリヴァンの生活史と思想をつきあわせることで、サリヴァンの思想をより深く理解しようとする試みは—もちろん、過度の心理学主義に陥らないよう自制は必要だが—読者一人ひとりの知的楽しみにとっておかれている。

訳はこなれていて読みやすい。これだけの大部の著書を訳出された訳者の労に敬意を表したい。

(昼田源四郎)

〔みずす書房 第一巻 一九八五年 A五判 三四八頁
五、〇〇〇円 第二巻 一九八八年 A五判 三六二頁

六、五〇〇円〕

朝日新聞社編『江戸の動植物図—知られざる真写の世界』

昨今、ナチュラルヒストリー、ボタニカルアートのブームのようである。本書もそのブームに乗ってでてきたもので、江戸時代の動植物図譜の絵図をカラー版で見せたものである。当時の彩色図譜は、費用の面から、稿本のまままで終ったものが多い。そのような稿本は、展覧会の時ぐらいいしかお目にかかれない。その点に本

書出版の意義があろう。

「松平頼恭と三木文柳」(文・木村陽二郎)、「森野藤助の『松山本草』」(文・木村)、「応挙、若冲、春溪の動植物画」(文・木村、小野沢うばら)、「灌園、愨齋、溪愚の植物図」(文・木村)、「丹洲、雪齋、楽圃の虫譜」(文・小西正泰)、「武蔵石寿の『目八譜』」(文・奥谷喬司)、「奥倉魚仙の『水族四帖』」(文・阿部宗明)、「堀田正教侯の『堀田禽譜』」(文・菅原浩、柿沢亮三)、「異才関根雲停の動物図」(文・佐々木利和)、座談会・江戸の動植物図の豊かさ(木村・阿部・小西・菅原・柿沢)、総論・江戸期の植物図・動物図の発展(木村・小西)。

高松藩主松平頼恭は、藩の殖産興業に尽力し、本草好みで、平賀源内を本草家として登用した人物である。森野藤助は吉宗の時代に本草家植村政勝に従って採薬旅行を行い、現存の森野薬園をつくった。栗本丹洲は本草家田村藍水の次男、田村西湖の弟である。増山雪齋は伊勢国長島藩主で動植物の写生で有名。飯室楽圃は江戸の本草同好会緒鞭会同人である。武蔵石寿も緒鞭会同人である。堀田正教は佐野藩主で幕府の若年寄を務めた。本草好みで、京都から本草家小野蘭山を江戸の医学館に招いた人物である。また、旗本毛利梅園、熊本藩主細川重賢の鳥図を載せている。兩人とも本草好みであった。岩崎灌園、飯沼愨齋、山本溪愚は歴史に残る本草家たちである。

三木文柳、円山応挙、伊藤若冲、森春溪、関根雲停は画家たちであり、奥村魚仙は青物商であった。これらの人たちが生まれた江戸時代は、平和と殖産興業政策、さらに文治政治が本草学を興

隆させた。本来、漢方医学に結びつく薬物学であった本草学は、その中で、名物学を盛んにさせ、さらに物産学を生んだ。本草学の流れは、本草家のプロ化を生む。有用無用を問わぬ博物学の傾向があらわれ、大名、旗本、町人たちのアマチュア本草家たちが輩出してくる。

文献中心から実地重視へと進むとともに、西洋の動植物図の影響から、写実的で科学的な動植物図がつけられるようになって行った。本書の意義は、医学史、本草学史、博物学史の本の中に出てくる人物たち、その人々たちによる著作の中の彩色の動植物図を、書齋で目のあたりにすることができることである。江戸時代の本草学に関心のある人にとっては持っている損のない本といえることができる。

(矢部 一郎)

〔朝日新聞社 一九八八年 二五・八cm×二一cm〕

一六二頁 二、四〇〇円

斎藤祥男著『蘭医家坪井の系譜と芳治』

坪井信道の塾頭大木忠益は、信道の次女幾と結婚し、坪井為春と名乗り芳洲と号した。坪井芳洲は幕末・明治初期の優れた医学教育者として名を残しており、故青木一郎、故仲田一信両氏、最近では山形大学の松野良寅教授の研究がある。

芳洲の子坪井次郎は、京都帝国大学医科大学の初代の学長を務

め、また同大学衛生学の最初の教授であった。坪井次郎については、西川瀨八教授の紹介論文と、藤野恒三郎名誉教授の『日本細菌学史』中の記載がある。

坪井次郎の子坪井芳治は、小児科医として中国の上海に渡り、令息の主治医として文豪魯迅の知遇を得た。坪井芳治のことは、筆者（泉）が医史学会で報告した。

今回出版されたこの書は、坪井芳治の女婿斎藤祥男氏（中央学院大学教授）が、家伝の資料を駆使し、また生前の坪井芳治を追憶しながら執筆した、坪井芳洲の家系を通ずる伝記である。坪井芳洲の一族についてこのような伝記は今までなかっただけに、その価値はきわめて大きい。内容も、著者自身が家系の一員であり、また家伝の資料を使用しているため、新しい事実や貴重な証言が多く含まれている。

この本の特徴の第一として、坪井家および関連の人物についてきわめて詳しい。青木氏の研究が基礎となっているが、記述はさらに詳細で、たとえば坪井芳洲の後妻柳子とその子謹三郎について明確に記載されたのは、この書が最初である。

坪井家の発祥が、一般史の立場から綿密に分析されているのも、著者の視野の広さを物語っている。

第二の点は、坪井次郎についてのいくつかの新知見である。従来不明であった墓が京都市高台寺にあることも、著者によって確定された。ベッテンコーフェルの弟子であった坪井次郎が、留学から持ち帰った写真が掲載されているのも、研究者にとって見過ごすことのできない資料となろう。

第三に著者は、義父坪井芳治に対する愛惜の念をこめて、その人間像を生き生きと描き出した。『魯迅日記』に登場し、また魯迅が詩を贈った相手として研究者に知られながら、一般には知られることの少なかった坪井芳治の全貌が、この書によってはじめて明らかとなった。魯迅との交友の状況の証言も、魯迅と日本人との交流を側面から描いた記録が少ないだけに興味深い。

写真が掲載されたバイエルン王国軍医総監の名がローツベックで、鷗外森林太郎の『ドイツ日記』にも出ていることなど、この書の出版に触発されて明らかになった事実もいくつかあるので、今後追加を加えながら、坪井家研究および魯迅研究の基本文献として、版を重ねることを期待したい。

〔東京布井出版 一九八八年 A五判 三〇六頁 三、〇〇〇円〕
(泉 彪之助)

篠木弘明著『蘭方医 村上随憲』

郷土史家篠木氏は、上毛近世文芸研究の第一者である。氏はつねに、中央にあれば高く評価される能力がありながら、田舎で一生を終ってしまったために埋もれてしまった、郷土人の業績を顕彰しようとしている。『蘭方医 村上随憲』は、村上家に残っている膨大な古文書を閲読した労作である。本書は、一八八頁まで、これら資料のうち、随憲の写本、施設記録、諸筆録、来簡を

紹介し、次に長男宗俊、次男秋水、三男俊平、孫淡雲の日記、筆録、来簡を紹介している。とくに随憲の施術記録は、当時の蘭方医の資料として貴重であり、随憲宛の高野長英、栗原順庵、今村了庵等の書簡は、新資料である。また次男秋水の日記は、当時の蘭方医の生活を知るうえで貴重である。これらを踏まえた上で、一八九頁より二四四頁まで、村上随憲伝を詳細に書いている。

本書によれば、村上随憲は、寛政十年、武州熊谷在に生まれ、十八歳の時、江戸の蘭方医吉田長叔に入門した。修業一〇年の後、シーボルトの鳴滝塾のうわさを聞かや、文政七年長崎へ行き入塾し、シーボルトが帰国するまでの四年間薫陶を受けた。ちなみに、高野長英の長崎行は、随憲の一年後である。三十一歳で帰郷、結婚し、境町で開業した。しかし、田舎に住んでも新進気鋭の随憲は、つねに中央に目を注いでいた。種痘法が日本に伝わるといういち早く採用し、まず自分の子女に試みて無害を証明した後、近隣の人々に普及した。後には、種痘所を設けて毎年定期的に実施した。

新知識を得るため、蘭書の購入をしばしば高野長英に依頼している。随憲は、当時高価な蘭書を得ると、訳し写本し、原書は江戸で売り、また新しい蘭書を購入している。長英が手紙で「当方で写して差し上げようか、それとも貴君が写し取りますか」と書いていることからして、随憲の語学力が伺われる。随憲の書き写した蘭書を、篠木氏は専門外の分野として、一部を紹介し他は書名のみ紹介している。また本書では、随憲は尚歯会の一員となりつねに時勢を論じている。そのため、蚕社の獄では、一時身を隠

さねばならなかったが、脱獄した高野長英を庇護する義侠があった。そして、病診のかたわら私塾を開き、医学とともに経世の学を講じ、多くの子弟に尊王思想を説いた。門弟の多くは、維新で活躍したが、子の俊平は安政の大獄で刑死し、同時に多くの門弟が犠牲になった。慶応元年六十八歳で世を去ったが、その生涯は、充実多彩なものだった。

右のような偉才を顕彰しようとする著者の意図がよく理解できる良書である。著書は本書の中で、本来随憲関係資料は各専門分野にあり、専門家によって研究解明されるならば幸いであろう。上州の片隅にあっていち早く蘭語を解し、これを医術、博學、経世に役立てた功績は大きかったはずである。会員のみならず、とくにシーボルト、蘭学を研究されている方の御利用を希望したいと思います。

(高野 守啓)

〔桜井印刷社 一九八八年 B五判 二四一頁 二、五〇〇円〕

飯沼慾齋〔草木図説選〕 木村陽二郎解説『四季草花譜』

飯沼慾齋『草木図説』草部の彩色画の一部が出版された。江戸時代、本草学から脱皮して近代植物学をうちたてた慾齋の『草木図説』は、明治末期になってもなお改版して使用されるほどの進歩を示していた。この図説の彩色画は生前完成しながらうもれ、いま日の目をみたのである。昨年復刻された無彩色の『草木図説』

草部の付録とみなすことができる。

本書の副題に「博物図譜ライブラリー」1とあるから、続刊が予想されるが、本草学的図譜には鳥類、魚類、虫類、獸類など派手な美しいものが多いから期待して待ちたい。

この頃類似の古典的図譜の出版が続いている。形や色彩が優れているのは結構であるが、多くの本草学者たちの作品の中から、一般向けのものだけ集めたり、珍奇を求めて売らんかなの風潮になって氾濫するのは科学的見地から好ましいとは考え難い。この『本草図説選』のように、高い科学性に支えられた傑作は決して多くはない。ただ珍らしく美しいというだけなら、現代の情報網と写真技術を駆使すれば、目をみはるようなものはいつでも、いくらでもできるであろう。こうみえてくと古典物の出版においては、その解説が大きな比重をもつことになる。木村陽二郎博士による愋齋の伝記とその力作成立の過程は、地元の研究者たちの成果ももろさず反映させた詳細で親切なものである。愋齋の科学的な位置づけと価値をよく伝えて、この種古典物出版の目的によく答えている。

木村博士の解説中、愋齋に直接関係はないが、一応本草学研究の定説のようにみられている二点について私見を述べたい。その一は愋齋と岩崎灌園を、優れた図譜の作者として同格に並べるには問題がある。灌園は薬草類の絵を多数画いてその作品を幕府や上司に献上した。業績は少数の支配者たちに觀賞されたが、本草学発展に役立つか疑わしい。愋齋の図鑑は国民的に親しまれ、近代自然科学教育に大きく貢献した。この両者の差は注目すべきであ

り、そのよって起る原因は、両者の社会的立場によるであろう。灌園は江戸に住み支配階級武門の末席にいて、終生幕制の拘束下にあった。愋齋は官に何の関係もなくはげんだ地方の民間人であった。家業を隠退した後も往診によって生計を支えながら、まったく自由な立場で植物の研究に専念したのである。その二は伊藤圭介の大きな写真を載せて視覚で圭介を過大評価した点である。名古屋における人物評価は古く、それ故の不備はやむを得ないが、なかには故意と思われるものもある。木村氏の解説を読めば『泰西本草名疎』は愋齋の植物学名調査に部分的に利用されたにすぎないことはよくわかる。そうであれば圭介の写真は掲げる必要はあるまい。圭介には種痘導入のような事績はあるが、その高名を裏つけるような著作は見当らないのである。江戸時代の博物学的古典図譜が普及する機会に、本草学発展に貢献した人びとの業績が公平に評価されることを期待したい。

(安江 政一)

〔八坂書房 博物図譜ライブラリー・1 一九八八年〕

A四判 一六四頁 四、二〇〇円

クロード・ダレーヌ著 小林武夫・川村よし子共訳
『外科学の歴史』

人類の発生以来、外傷の治療は行わざるを得なかった手技だったにちがいない。したがって外科の歴史は先史時代にまでさかの

ぼることになる。世界の外科の歴史をこの「文庫クセジュ」に要領よくまとめることは容易なことではなかったであろう。

本書では、第一章の古代外科医術として、先史時代から十九世紀前半までを八六頁にまとめ、急速な進歩をとげた近代の外科（現代、将来を含む）を後半七三頁に記載してある。フランス医学の全盛期だった十九世紀前半までを近代でなく、古代に入れたのは、麻酔や防腐、無菌法の外科の革命的発見以前だったからであろう。それまでのフランスの外科の歴史、とくに理髪外科、サンコム外科医学校、王立外科アカデミー、革命前後の外科のことなどは、著者の自国のことだけに、詳細に記載されている。

第二章の外科の革命には、麻酔、防腐法、無菌法の発見を記載している。麻酔法の発見には、興味深いエピソードが紹介されている。麻酔によって進歩した新しい手術手技が記載されているが、外科医が日常施している「ドレナージュ」を発明したシャセニャックの名は、日本ではあまり知られていないのではないだろうか。防腐法のなかで、産褥熱の予防法には、ゼンメルweisとともにホームズの名も省略していない。無菌法発見はバストゥールの功績で、フランスのテリヨンが最初に施行したが、残念ながらドイツのベルグマンに先取権をとられてしまった。そのことに関し、ルリッシュはつぎのように記載している（ルリッシュ著、森岡恭彦訳『わが生涯の一期一会』）

「手術のときの殺菌はバストゥールの弟子のオクターヴ・テリヨンの創設したものであり、ベルグマンやテリエの創設したもの

ではない。否定できない幾つかの文書がある」
一九五七年フランスで、無菌法の創設者としてテリヨンの切手が発行されているほどだから、本書にもこのことをはっきり記してもらいたかった。

第三章近代の外科学には新しい手術法や技術が記載してある。新しい麻酔器の発明、輸血輸液による蘇生術の進歩、放射線、顕微鏡その他の器具による診断治療の進歩、抗生物質の使用などによって、従来困難視された脳、心、肺、肝、脾などあらゆる臓器の手術が可能となったと述べている。

以上簡明な記述であるが、筆者が気付いた歴史的事項として、ビルロートの胃切除術、コッヘルやアイゼルスベルクの甲状腺外科、クッシングらの脳手術の開発などの苦心や、グロッシヒのヨードチンキ塗布による手術野皮膚消毒法などの記載がない。これは外科の歴史として省略できないことだと考える。

本書の原本 *Histoire de la Chirurgie* の第一版は一九六一年に発行され、この訳本は一九八四年の第三版によっている。訳者が直接著者ダレーヌ教授を訪ねていろいろ相談したことや、読者の理解を助けるために、原著にない二〇以上の画を挿入した労に心から敬意を表する。

(古川 明)

〔白水社 一九八八年 文庫クセジュ 一七一頁 七五〇円〕

これは一九八七年からソルボンヌの教授として十九世紀史を講じているアラン・コルバン（一九三六～）の著作（一九八二）の訳書である。

十八世紀から十九世紀にかけての西欧は、あらゆる意味で「視覚」の時代であった。いっぽうでは、この視覚は、すべてを明るみの中に駆り出して監視する装置としての権力の支配のためのまなざしであり、また同時にそれは、他方では近代的名なまなざしの悦楽の源泉としての視覚でもあった。

このようなゆるぎない視覚優位を最大の特徴とする二世紀のあいだ、嗅覚の側ではいったい何が起っていたのか。——この主題を、著者はこの大著の中で、パリを主舞台に、豊富な記録や文芸資料を駆使して、アナール派の面目躍如たる手法で展開して見せてくれる。

著者によれば、嗅覚というものは「蔑視の対象とされ、ビュッフォンからは動物的な感覚といわれ、カントからは美学の領域からしめだされ、……生理学者によってたんなる進化の残渣とみなされ、さらにはフロイトによって肛門性と結びつけられて、……においの語りだす言説はタブーあつかいにされてきた」。

われわれ日本の読者は、幕末の江戸の街の不潔で猥雑な実状を当時の欧米人の記述でよく承知しているが、本書に見るパリも決

して生やさしいものではない。ヴェルサイユでさえ、「大庭園も……宮殿さえもが吐き気を催すような悪臭を放ち、連絡通路、中庭、両翼の建物、廊下などは小便と大便がいたるところに撒き散らされている。……サン・クルー大通りはよほど小便と猫の死骸で覆われ、……異臭は王の居室まで上がっていった」。

著者はこうした各方面の実状を丹念に記述したあと、悪臭と長いあいだ仲よく同居してきた人々が、ある時期からそれに嫌悪と脅威を感じ、発展途上にあつた公衆衛生学がその撲滅を図ってゆく経緯を描き出している。その感性の変化によって、はじめて近代は「悪臭」を発見したといえるので、これが本書の副題が「嗅覚と社会的想像力・十八～十九世紀」となっている理由でもある。

ただし、公衆衛生の歩みは平坦なものではない。「あいかわらず月経周期が入浴の間隔を支配し、……月に一度以上の入浴を勧める専門家（はまれで）、フーフエラントは週に一度の入浴を勧める大胆な処方を出した」が、一般には過度の入浴は血色を悪くし、肥満を招き、美をそこなうとされ、また女性は「裸体を」ぬぐい終るまで、眼を閉じていなければなりません。英国からの舶来品である浴槽を使うのはスノビズムとされ、一九〇〇年の時点では、パリの大部分のブルジョアジーは時たまの足湯で満足していた。

近代的な糞尿処理への抵抗も強く、肥料商人・農学者・化学者は口を揃えて、脱臭剤は糞尿の品質を落とすと主張し、肥溜めの消毒を企てたりル市は猛反対を受けたのである。

ちなみに、本書の原題は『瘴氣と黄水仙』であって、その「序」が公衆衛生学の父とされる「ジャン・ノエル・アレと悪臭追放の闘争史」と題され、終章が一八八〇年のペリの悪臭事件（犯人はかつての汚物・糞便ではなく、工業産物であった）を扱っているのは興味深い。瘴氣はまさに細菌学以前の病因論の主役であり、そして黄水仙は公衆衛生学が悪臭を追放したあと、以前の強烈な香料に代ってブルジョアジーのナルシンズムの源泉となったほのかな花の香りを代表しているのである。

前記のとおり、本書は医学者、歴史家、作家の名前や引用で充満しているが、日本人としては足立文太郎が英国人の体具に言及した事実に触れている。

史学の盲点ともいえる「感性の歴史学」の中でも、もっとも未開拓の分野に挑戦したこの野心的な大著を翻訳して、世に送った訳者たちの努力に対しては、深い敬意を表したいと思う。一二ページに及ぶ口絵図版を添えた配慮も適切である。それだけに、興味深いディテールに満ち溢れたこの大冊の訳書が、七〇頁に近い補注を存しながら、索引を欠いていることが何とも残念でならない。

またもう一つつけ加えるならば、「プス」・「ピエ」・「リール」・「アルパン」・「レオミュール温度計で一〇度」などと、随所に出てくる多くの日本人読者にとって馴染みも、確かめるすべもなさそうな単位については、ぜひ訳注をつけていただきたかったと思う。

〔新評論 一九八八年 A五判 三九八頁 四、八〇〇円〕

（三輪 卓爾）

いま、なぜ、丸山博か

丸山博著作集

全3巻

生命を衛(まも)り未来を拓く

運動を担う方々のために

●衛生とは「生命と生活と生産を衛(まも)ること」
森永・砒素三ルク・中毒事件の追跡調査、救済で知られる丸山博(元大阪大学医学部教授)の業績を、すべてが管理され、基本的人権擁護の最優先課題である「生存の自由」の確保すらあやうく、人間がより人間らしく生きることを願い働こうい々に贈ります。

① 死見をして叫ばしめよ
乳児死亡・母子衛生問題の統計的把握と実地活動。

② いま改めて衛生を問う
公衆衛生の理念を問いかえし、今何が必要かを提言。

③ 食生活の基本を問う
生命・健康の根源的把握としての「食」に関する提言。

11月6日毎月1巻刊行 ●A5判・上製・平均30頁*予価各3500円

開けてみると眼がとつぶれる謀叛の書!

安藤昌益全集 (全21巻 別巻1)

ルソーと同時代に生き「謀叛の書」として永らく陽の目を見ることのない思想家・安藤昌益の現存する資料を網羅した二冊の書。全巻復刻・全巻書下し文・全巻現代語訳・注解解説の構成!

●毎日出版文化賞特別賞受賞 / ●挿画102・800円(税抜)

農文協

東京都港区赤坂7-6-1
電話03(585)1141(代)

●内容見本呈
(*印は税込・●印は税抜)

予約受付中!

